兵庫県産蝶類目録 (2)

山本広一・吉阪道雄

Ⅳ ウラギンシジミ科 CURETIDAE

1. ウラギンシジミ Curetis acuta paracuta De Niceville

山地と平地とをとわず広く分布する。年3回の発生と考えられ（夏型6月，8～9月）；秋型9～10月）越年した母蝶（秋型成虫）は翌春フジの若芽に産卵する。越冬はツタなどの常緑葉の間で行われ、しばしば強い風雨にたたかれて墜死するものがある。

神崎郡七種山　　朝来郡生野町
宍粟郡波賀町　　神戸市御影町
姫路市手柄山

Ⅴ シジミチョウ科 LYCAENIDAE

1. ムラサキシジミ Arhopala japonica Murray

6～10月の候各地に見うける。1年数回の発生を繰りかえし、越冬した母蝶は早春アラカシの休眠芽の根元や小枝などに1粒ずつの卵を産みつける。孵化した幼虫は枝端の若葉を裏捲きにして中にかくれ、ためにその発見も難くない。幼虫の分泌する液はアリにとつて好むところとみえ、終令近く成長したものの体上には大てい幾匹かのアリが観察される。

三木市別所町　　神戸市六甲山、摩耶山
小野市下来住町　　佐用郡久崎町

2. ウラゴマダラシジミ Artopoetes pryeri Murray

広く各地に産するも、一般に個体数は少い。東播地方での山本の観察は、最近特に減少したようである。昔はずいぶん加古川沿いの茂みや池畔などに、その姿を見うけたものであるが、今ではほとんど見かけない。やはり土地の開拓や河川の改修によつて、幼虫の食草であるイボタノキが他の雑木とともに伐り払われた結果であろう。

年1回、早くも5月末頃より現れ、6月の上中旬より7月にいつてなお残存するのが見られる。

小野市下来住町　　神戸市兵庫区山田町、住吉町
川西市東谷

3. ウラキンシジミ Ussuriana stygiana Butler

1931年6月18日神戸市鷹取山麓に発見された本種は当時山田舜亮氏や江上潤次郎氏らによつて40頭近い個体が採集された。しかし、その地は後年開拓されて住宅地となり、現在では往時の面影をとどめない。これはまことに残念なことで、蝶の将来にも一抹の不安が感じられたが、やがて神戸市兵庫区の小部・山ノ街をはじめ六甲山・摩耶山や西宮・武田尾・宝塚・川西市東谷・川辺郡西谷に新らしい産地が見つかり、前途に明かるい見通しが得られるようになつた。しかし、その発生地は上述の通り、すべてが六甲山系若しくはその周辺の地に限られ、恰も神戸地方特有の種であるかのような感もないではなかつた。

ところが、数年前より氷上郡下の鴨庄・春日部に産することがわかり、ついで佐用郡久崎（1951年吉阪採集）や養父郡大屋町（1958年中尾淳三氏西谷中学校庭に採集）にも採集され、（また最近は西脇市内にも得られた由である）分布範囲の大きいことが判明してきた。ことに中央分水山脈地帯は将来大いに刮目すべきところと考える。

さて、六甲山域における発生ぶりはとくに注目に値する。それは花崗岩とマツを主とする単調なフロラの中に、本種の食樹であるコバノトネリコが雑木として栄え、こうした結果となつたのであろう。たしかにヒメヒカゲとともに、この地の蝶相を構成する大切な分子となつている。垂直分布は200～900m、その最低部はこの種の低地発生の一例をなすものと思う。

発生は年1回、六甲山にあつては山の南北両斜面によつて出現期を異にし、表斜面では6月中旬より7月初旬に、また裏斜面では7月上旬より下旬に及んでいる。やはり日照や気温が関係するためであろう。

六甲山系の成虫は一般に小型で、翅裏面の地色が暗く、橙色紋列がよく発達する。かつて新昆虫vol. 10, No. 1 (1957) の表紙に登載された個体は該地産のものであり、上記の特徴がよくうかがえると思う。

異常型として知られた ♀—ab. akio Esaki は現在本県下には採集されておらない。そして将来に得られるとしてもむしろ稀なことであかろう。（尚この型は表面の後翅肛角部や前翅中室の近くに赤色斑の現われたものである）

養父郡大屋町　　佐用郡久崎町
氷上郡春日町　　川辺郡西谷村
川西市東谷　　神戸市摩耶山、六甲山、奥妙法寺

4. アカシジミ Japonica lutea Hewitson

各地に見られるが、個体数はその普遍的な分布の割に多くない。

発生は年1回、5月末より現われ、7月に及んでも目撃することがあり、出現期間は相当の長期にわたつている。

神戸市御影町、摩耶山　　佐用郡久崎町

小野市下来住町

5. ウラナミアカシジミ Japonica saepestriata HEWITSON

各地に産するも、あまり深山には見られない。これは幼虫の食樹であるクヌギの垂直分布の限界によるものと思う。前種に比べて、局地的な傾向が著しく、個体数は一般に豊かである。とくに川西市東谷辺りより大阪府能勢地方にかけての発生はすばらしく、夕景クヌギの梢上に見られる活動ぶりはまことに見ごとである。しかし六甲山系においてはむしろ前種の方が優勢であり、加古川中流の小野市付近にあつては近年その数をまし、二十余年の往時とは全く両種の位置を転倒したかのようにうかがえる。

発生は年1回、前種に遅れて出現し、個体は6月中旬を頂点として次第にその数を減じ、8月に入つてなお残存個体の見られることがある。

卵・幼虫・蛹ともにクヌギに得られる。

川西市東谷　　佐用郡久崎町

神戸市杣谷、御影町

6. ミズイロオナガシジミ Autigius attilia BREMER

各地のコナラ・クヌギ・ナラガシワの雑木林に多く、5月末旬より現われて中旬に多く、山地にあつては7月にいつてなお珍しくない。幼虫はこれらの植物を食樹とし、卵は休眠芽を少しく距つた小枝の上に産下される。

年1回の発生。

翅裏面の斑紋は変化にとみ、本県よりは異常型として ab. sayamaensis WATARI（前翅裏面の基部に1箇の過剰紋を現わす）が採集されている。

小野市下来住町　　神戸市御影町、摩耶山

朝来郡段ケ峯　　佐用郡久崎町

7. ウスイロオナガシジミ Antigius butleri FENTON

県下の発生地として現在筆者らの知る範囲は極めてせまく、佐用郡久崎町・宍粟郡下の一部並に美方郡氷ノ山がそのすべてである。しかも久崎町を除けば殆んどが記録的な存在にしかすぎない。

久崎産はナラガシワを食樹とし、氷ノ山産はおそらくミズナラによるものと思う。佐用郡久崎町には極めて多産する。此の現象は岡山県倉敷市付近へ連続して見られるが、これより東部には見られず、恰も切断された形である本種の分布上、重要な意義を持つものと思う。此の地域一帯の蝶相は全く岡山県下と等しく、これ等はその食樹並に地質、気温（栽培植物に於いても同じく此の例は極めて顕著で県東部と一劃される由）に関係があるものと考えられる。

年1回の発生。低地にあつては6月中旬より7月にわたり、佐用郡久崎町ではウラジロミドリに次いで発生し、ミズイロオナガ、ウラナミアカシジミと混棲する。山地には8月にいつてなお残存することが知られている。

佐用郡久崎町　　美方郡氷ノ山

8. ウラミスジシジミ（ダイセンシジミ）

Wagimo signata quercivora STAUDINGER

1931年6月、小林桂助氏が本種を六甲篠原に発見して以来、六甲は本種の有数な産地として種々の昆虫図鑑や採集案内書にうたわれるようになつた。当時この蝶は筆者たちにとつて垂涎の的の一つであつた。しかし、本場の伯耆大山でさえ、多くの個体を期待できず（1934年7月6日雨あがりの昼過ぎ中腹の大山寺村槇原に一挙6頭を得たことはあつたが）、また近畿の産地大阪府箕面もはなはだ望みうすい状態にあつたから、交通に便利なこの地が愛蝶家の関心をたかめたのも当然である。発生の現場は阪急六甲を僅かに上つた登山路わきのクヌギ林で、3～40mばかりの範囲に限られていた。山本もしばしば訪れた。しかし、何分にも自宅からの距離が遠く、阪急も上筒井終点の頃なので、赴くにも容易でなく、目的地に着いた時はすでに大ぜいの先客によつて丹念に採集された後であり、しかも上述のような狭い場所とて目こぼしのあろうはずもない。ようやく1頭を得ただけで、林は伐採され、ついには住宅地と化してしまつた。そうして神戸を象徴？する2種の蝶――ウラキンと本種――が相ついで同様なコースを辿つていつた。

しかし、幸にもその後蝶は摩耶山麓の青谷や御影・甲南大学付近・有馬・山ノ街・多井畑方面にいることがわかり、少しは愁眉を開いたものの、さりとて幼虫の食樹が薪炭用として重要なクヌギやコナラであるだけに無条件な楽観は許されない。現に、戦前かなりの発生があつたといわれる摩耶山麓が雑木の伐採によつてその数を減じ、昨今では1～2頭位が年間に採集される状態にさえたちいたつているという。

さて筆者らが従前知り得た県下の産地はすべて六甲山系に属する一帯に限られていた。ところが本年（1958年）中尾淳三氏らによつて新な発生地が但馬の南部に発見され、すでに標本の一部が山本の許に届けられている。場所はやはりクヌギの混生林らしく、当時氏に同行した中学生によつても2頭ばかりが採集された由、今後はさらに播磨・但馬の国境山地より新しい産地が報告されるにちがいない。

年1回の発生。6月中旬より現われ、深山部では8月に入つてなお存在することが想像される。

神戸市六甲、摩耶山麓　　養父郡大屋町

9. ウラクロシジミ Iratsume orsedice BUTLER

1906年佐竹武一氏の採集記録により、但馬地方には

早くからその存在が知られたが、山本も1937年8月これを氷ノ山越えの中腹に認め、その後守本陸也氏や吉阪らによつて採集されている。その他、西村公夫氏らにより美方郡扇ノ山や神崎郡段ケ峯の産地が確認され、最近には中尾淳三氏によつて養父郡大屋町からも採集された。しかし個体数は何れも少く、発生は年1回、7月を中心とし、稀に8月に及ぶことがある。

養父郡大屋町　　美方郡氷ノ山

10. オオミドリシジミ Favonius orientalis MURRAY

各地に広く分布するも、個体数は割合に少く、分布様式は前述のアカシジミに酷似する。

発生は年1回、6～7月、他のミドリシジミ類にさきがけて出現し、♀の中には比較的完全な個体がかなりの後まで残存することがある。おそらく産卵と関係があるのであろう。7月おそく神戸生物同好会の児童が神戸市布引に得た例もある。

異常型として吉阪は♀の後翅の裏面にある赤色斑中（肛角部）の黒紋が著しく消失傾向にある個体を所有しており、また山本の標本中には、後翅の裏面第7室に細く灰色で縁取られた1箇の過剰紋のある川西市産の1個体がある。

小野市下来住町　　川西市東谷

佐用郡久崎町　　神戸市摩耶山

11. ヒロオビミドリシジミ Favonius sp.

本種は近く発表される新種で、かつて山本が本誌 vol. 2, No. 3 "兵庫県佐用郡久崎の蝶 (2)" 目録 no. 36, Favonius sp. (Favonicus sp. は誤り) に記載した久崎産の一部は paratype となるはずである。

山本が初めて本種を見出したのは1934年6月のことである。久崎部落の裏手、川を渡つて抜位部落に通じる谷間で、ナラガシワやクヌギが混生した 1aに足りない所から4♂♂1♀がオオミドリやウラジロミドリとともに採集された。しかし、この辺も数年後には新道が開設され、雑木の払われたため土地の様子が変わり、さらに1♂が追加されたのみで採集は不能となつた。それゆえ、はなはだ珍重される蝶となつたが、最近吉阪らによつて再び同町内に新たな棲息地が発見され、毎年相当数が得られている。

県下には1953年さらに水泉一志氏が川西市笹部に1頭を採集したが、ともにはなはだ局地的である。そのため新産地の開拓は容易でないが、幼虫がウラジロミドリ同様ナラガシワを食樹とする関係上、これを手がかりとして精査すれば、必らず新しい知見が得られるに違いない。少くとも日本海斜面や県の西部並びに東の低山地には発見の可能性が大きい。

年1回6月中旬より7月上旬に得られ、日週活動は他の近似種とやや趣を異にして、午前9時より正午に最も旺んとなる。最近若林守男氏によつて飼育が成功し、生態が明らかにされた。

佐用郡久崎町

12. エゾミドリシジミ Favonius jezoensis MATSUMURA

山地帯に限られ、現在では神崎郡段ケ峯及び美方郡氷ノ山・養父郡大屋町がその産地としてあげられる。分布様式は前述のアカシジミやオオミドリシジミに近似し、美方郡氷ノ山ではゼフィルス中個体数の最も多い種である。これは注目に値すると思う。

次種のジョウザンミドリシジミと比較して発生期は早く、日週活動が午後に現われることにその相違点が認められる。

年1回の発生。垂直分布は次種よりも低く、今後さらに新な棲息地が追加されることと思う。

美方郡氷ノ山

13. ジョウザンミドリシジミ Favonius cognatus jozanus MATSUMURA

美方郡氷ノ山が現在までに知り得た唯一の産地である。一般には個体数の多い山地性の蝶であるが、氷ノ山にあつては前項に記したような状態にある。

年1回の発生、7～8月の候に採集される。

美方郡氷ノ山

14. ウラジロミドリシジミ Favonius saphirinus STAUDINGER

現在佐用郡久崎町と川西市東谷に知られるのみ。しかし隣接する府県下での分布状態からみて、さらに本県の東部や但馬地方にも得られることと思う。ナラガシワを食樹とするウスイロオナガシジミが佐用郡以東に知られないのに反し、本種は川西市より大阪・京都府を経て遠く滋賀・三重県下にまでその食樹とともに分布していることは注目すべき研究課題であろう。また本県において余り高地帯に見らないのは、その食樹が低地性のナラガシワによつてまかなわれている結果と推察され、長野その他のように垂直分布のより高いカシワ地帯に得られた例は近畿以西に知られない。もつともカシワ地帯もあることなので、将来も発見されないとは断言出来ないが、そうした場合この種の垂直分布は一だんと高まるわけである。なお東谷の発生地は標高凡そ100m、また久崎にあつて200mとなつている。

発生は年1回、6月中旬に現われて7月に及び、♀の中には8月にまで残存するもののあることが想像される。

佐用郡久崎町　　川西市東谷、妙見一ノ鳥居

15. ハヤシミドリシジミ Favonius ultramarinus hayashii SHIROZU

養父郡関宮あたりにはカシワ樹林があり、恐らく本種が発見されるだろうと予想していたが、ついに本年（1958年）中尾淳三氏によつて実証され、3頭の標本が山本に寄せられた。同地方にはかなりの個体が発生するものと思われる。

発生は年1回、ゼフィルス中出現の最もおそい種であることは、今回の標本が♀とはいえ、8月8日の採集にもかかわらず、はなはだ新鮮なことによつてもうかがえる。なお♂の出現は7月中旬、カシワを食樹とみて誤りはなかろう。

養父郡大屋町

16. フジミドリシジミ

Quercusia fujisana MATSUMURA

ゼフィルス中垂直分布の最も高い種で、本県では美方郡氷ノ山と扇ノ山に獲られる。その日週活動は午後より夕方にわたり、キアゲハと同様気流にのつて山頂に上昇してくる習性がある。それゆえ氷ノ山でも氷ノ山越より山頂に至る尾根路において、遭遇することが少くない。

年1回の発生、稀に8月に入つて著しく毀損した♀を目撃したこともあるが、一般に出現は早く、普通6～7月である。

ブナを食樹とする。

美方郡氷ノ山

17. ミドリシジミ

Neozephyrus taxila japonicus MURRAY

平地・山地ともに広く分布する。これは幼虫の食樹であるハンノキが県下の至る所に生育せる結果と考える。またかなりの高地帯よりも見られるが、その場合常にヤマハンノキに得られるので、おそらくそれが食樹となつているのであろう。

年1回、6～7月に発生する。川西市東谷地方その他の観察によれば、出現は平地性ゼフイルス中最もおそく、大たいウラゴマ・アカ・ウラキン・ミズイロオナガ・オオミドリ・ウラジロミドリ・ウラナミアカシジミについで本種となつている。♂はウラナミアカシジミと前後して現われ、♀はややおくれて、むしろ7月にいつて増加するようである。

群生の傾向が著しく、夕景食樹付近の梢上を軽快に活動し、2～3頭、時には4～5頭の♂がまつわり合つて昇降し、やがては追いつ追われて翔けまわる。筆者らの採集経験よりすれば、蝶は立ち並ぶ多くの食樹中にあつても、ある特定のものに集る傾向がある。これは母蝶がもつ奇性、即ち一定の食樹を選んで産卵をくりかえすらしいことに関連するのではなかろうか。

♀の示すO（無紋）、A（橙色紋）、B（藍色紋）、並びにAB（橙及藍色紋）の4型については地域によつてその比率を異にするといわれるが、本県産については詳細な調査が行われていない。1949～50年にわたる吉阪の川西市東谷での採集結果はO，B，AB，Aの順であり、A型は最も少い。しかし神戸市兵庫区山田町での観察はA，Oが断然優勢で、B及びABはいまだ獲られない。また小野・加古川両市ではO，A，B，AB，である。これらはさらに多数の材料にもとずいて解決すべき問題であるが、それぞれの地域における変化はかなりに複雑なものと思われる。

加古川市上荘町　　小野市下来住町

川西市東谷　　佐用郡久崎町

18. アイノミドリシジミ

Chrysozephyrus aurorinus OBERTHUR

垂直分布はフジミドリシジミに次いで高く、本県では氷ノ山並びにその南東山麓から知られているにすぎない。

年1回の発生、7～8月に得られ、ジョウザンミドリシジミ同様、日週活動は午前中に高頂に達する。

養父郡大屋町　　美方郡氷ノ山

19. メスアカミドリシジミ

Chrysozephyrus smaragdinus amoenus MURAYAMA

前種に比べ、垂直分布は低下するが、やはり山地性の種であり、飾磨郡雪彦山・朝来郡段ケ峯・養父郡大屋町及び美方郡氷ノ山に認められる。日週活動は正午前後にあたり、初めて本県より記録した雪彦山産の個体も、山本が中腹の紅葉橋上で昼食中に獲たものであつた。

年1回の発生、7月中旬より8月上旬にわたつて見うける。食樹はヤマザクラ。

養父郡大屋町　　飾磨郡雪彦山

以上ゼフィルスと呼ばれる一群が、最近次々と中央及び西部の山域より発見され、本邦産24種中19種までが本県下に確認されている。しかし、これらの種類は多くクヌギ・コナラ・ミズナラ・カシワ・ブナなどの殻斗植物（Quercus属）によるものであるから、今後これらの生育地について、それぞれの発生期や特異な日週活動を考慮して索むるなれば、さらに新しい産地や種類が追加されるにちがいない。

20. トラフシジミ　Rapala arata BREMER

各地に広く、主に山地に見かける。年2回の発生を行い、春型は5～6月に、また夏型は7～8月に採集される。

夏型がミドリシジミ類と混じて活発に夕方飛翔することは、吉阪がしばしば神戸市六甲山や美方郡氷ノ山

に目撃したところであり、また春型がフジやウツギの若芽や蕾に産卵することも確認されている。

神崎郡大河内町　神戸市御影町、六甲山、摩耶山
朝来郡竹田町　　宍粟郡千種村

21. カラスシジミ
Strymonidia w-album fentoni BUTLER

1932月6月西宮市甲子園にて採集された記録があるが、それ以来どこからも確実な報告に接しない。ところが、今回はからずも養父郡若杉峠に発生することが譲尾勲君の採集によつて判明し、1♂が山本の手許に届けられてきた。6月中旬より7月に現われ、個体数はかならずしも多くないようである。しかし今後はさらに播磨但馬の国境山地に発見されることと思う。

養父郡若杉峠

22. コツバメ　Ahlbergia ferrea BUTLER

各地に見られるも概して山地に多く、早春1回出現する（平地3～4月、山地4～5月）。

食草は未確認であるが、神戸市六甲山ではアセビの花に多数群ることが認められ、また他府県よりの報告にもこれを食餌とする旨が記されているので、本県にあつてもおそらくこれに産卵するものと思う。

大きさの点において個体的な変異が大きい。

神戸市六甲山　　加東郡五峯山
西宮市武田尾

23. キマダラルリツバメ
Spindasis takanonis MATSUMURA

本県よりの記録ははなはだ古く、早くも明治35年（1902年）揖保郡竜野に獲られた旨が福田（駒井）卓氏によつて報告されている。（後にこの標本は高野鷹蔵氏を経て松村博士に届けられ、命名のタイプとなつた）。ところが、その後50年、かえつて隣接する鳥取や京都・岡山の府県には、次々と新らしい発生地が発見されたにもかかわらず、いわば本家格たる本県からは一向に消息が絶たれていた。もつとも、その間にあつて、名和昆虫研究所の採集人高見筆太郎氏が佐用郡久崎に採集していたことが、最近の井口宗平氏の記録（1951年）より明らかにされたが、詳細は判らず、採集個体も2頭程度のものであつた。

これはまことに遺憾なことであつたが、1955年ついに小野市から2つの棲息地が発見された。その1つは山本の私有地であり、山本が過去何十回となくかけ廻つた所である。この蝶をもとめて県外までも出かけて10余年、それがこうした結果になろうとは余りにも燈台は下暗く、皮相の感にたえない。昭和20年春の失火によつて丸裸となつたこの辺りには、実生えたクロマツに混つてクヌギが散在している。蝶はその間をきわめて敏捷に活動し、やがてはマツの若葉やクヌギの葉末に飛来して羽をたたみ、縄張り区域を見守るかのような様子である。当時6頭を目撃し、うち4頭を得たが、個体数は乏しく、現在までに6頭を採集したにすぎない。ついで本年1958年姫路市付近にも有望な新産地が法西浩氏により発見されている。

発生は年1回、各地とも6月中旬より下旬に採集され、出現期間は案外に短い。

さて、本県産が鳥取県（原種 takanonis MATSUMURA を産す）と京都府（亜種 prospera OKADA を産す）の間に介在してその何れに属すかは興味ある問題で、さらに多くの個体について精査せねばならないが、山本の手もとにある小野市並びに姫路市産については鳥取型に属するものと確信する。（亜種 prospera は takanonis に比べて、表面の紫色斑が発達悪く、稍小型である）。

なお小野市産については裏面の黒条に多少の個体的変異が認められ、黒条の太くして帯状に連続するものと、各室毎に寸断されたものとがある。

小野市下来住町、青野原　　姫路市外

24. ベニシジミ　Lycaena phlaeas daimio SEITZ

各地に最も普通な本種は、モンシロチヨウ・モンキチヨウなどとともに、早春田畑の畦間に現われ、秋おそくまで活動する。

年内数回の発生を繰りかえす。

小野市下来住町　　神戸市御影町
淡路洲本市

25. ゴイシシジミ　Taraka hamada DRUCE

山間平地ともに広く分布するも局地的で、個体はむしろ多くない。現在筆者らの知る産地は、氷上郡粟鹿峯・美方郡氷ノ山・鉢伏山麓・宍粟郡の一部・佐用郡久崎町・小野市下来住町・神戸市兵庫区山田町・川西市東谷その他である。

発生は低地において年2回（6, 7月；9, 10月）、高標地にあつて1回(7, 8月)と推定される。

幼虫はタケノアブラムシを食餌とし、本邦唯一の食肉性奇蝶として知られる。

美方郡氷ノ山山麓

26. クロシジミ　Niphanda fusca shijima
FRUHSTORFER

低地より高地にかけて広く山地に分布する。翅裏面の地色に地方的な相異があり、六甲山系のものについていえば茶褐と白色にとんだのが多いようである。また♀の翅表に青白色を装うものがあるが、それらは東部の甲山付近のものに多く、中央部においては少く、西部の個体には見られない。

本種の生態もまたアリ・アブラムシとの共存関係を有するきわめて特異なもので、かつて吉阪は神戸市兵

庫区山田町にこれら2つの種類が共存するコナラの葉裏に、はなはだ特異な産卵を行つているのを見たことがある。

朝来郡段ケ峯　　神戸市六甲山、御影町
神崎郡七種山　　美方郡氷ノ山
小野市阿形町

27. ウラナミシジミ　Lampides boeticus LINNE

秋の候平地の畑に多数見かける。ことに幼虫の好むフジマメ畑には夥しく、かつて洲本市郊外に観察した饒産ぶりは今も記憶に新しい。またクズに集るものも多く、昨今小野市付近の加古川堤防上に展開される光景は一驚に値する。

本種の越冬に関しては明らかではないが、本県が年中見られる地域にあるとする説には、遺憾ながら肯定するだけの資料を持ち合わさない。もつとも冬期にあつて、幼虫や蛹を発見する場合もあるが、それらは所謂暖冬とよばれる年に限られたようである。

蝶が多く現れるのは8月以降のことで、曽つて吉阪が神戸市灘区青谷において、6月13日 2♂♂を採集した（不完全個体）例もあるが、蝶としては末期の発生に属し、11月にいつて多数の個体を見受けることが珍しくない。

小野市大島町　　神戸市御影町
洲本市外

28. ヤマトシジミ Z izeeria maha argia MENETRIES

各地至るところに見かける普通のシジミチョウであるが、あまり高地からは知られない。4～5月（春型）；6～8～9月（夏型）;10～11月（秋型）と連続して見られ、発生は年内おそらく3～5回を繰りかえすものと思う。

異常型として前翅裏面の斑紋が各室ごとに横に結ばれることがあり、現在山本の標本からもそうした2つの個体が見出される。

小野市下来住町　　川西市東谷
神戸市御影町

29. シルビヤシジミ Zizina otis emelina DE L'ORZA

学名 emelina のシノニムとなつた sylvia はかつて井口宗平氏が佐用郡久崎において採集した、3♂♂ 2♀♀をタイプとして中原博士が命名されたもので、本県にとつては由緒ある種である。ところがその後長らくの間近似のヤマトシジミと混同されてあつたのが1941年頃より蝶界の話題となり、次第にその分布の状態が判明するに至つた。しかし、その発生がはなはだしく局地的であるため目に触れにくく、現在県下には淡路洲本市・津名郡安平村・中川原村・富島町・神戸市（兵庫区）山田町・川西市東谷・加古川市加古川町・小野市南部・姫路市・朝来郡生野町栃原・宍粟郡・佐用郡久崎町・氷上郡黒井町生郷等が知られるのみ。一般に高地や山間部には見られず、海抜500mの栃原が最高の産地となつている。また日本海沿岸や北西の地域には未だ知られないが、おそらく近い将来に発見されることと思う。

幼虫はミヤコグサを食草とし、そのため従来多くは河川の堤防などに発見されてきたしかし、かならずしもそうとは限らない。

発生はおそらく年5回（春型4～5月；夏型7～9月;秋型10～11月、そして夏型と秋型はそれぞれ2回）と推察される。

小野市下来住町　　氷上郡黒井町
淡路洲本市　　加古川市加古川町
川西市東谷

30. ルリシジミ

Celastrina argiolus ladonides DE L'ORZA

海岸の低地より高地山間部に至るまで、各地に最も多く見うけるものの一つである。これは幼虫の食餌とする植物に大きな巾のあるためと考える。主食はマメ科植物ではあるが、中谷貴寿氏は加古川市よりイチジクの例を報告しており、吉阪はイタドリやカキの新芽に産卵することも観察している。

発生は年5回、又はそれ以上と推察され（春型4～5月、その間2回；夏型6～9月、2～3；回秋型9～10月、1～2回）、高地にあつて2～3回が繰りかえされるものと思う。出現はモンシロチョウ・コツバメとともに蝶類の先駆をなし、本県南部の低地にあつて大体3月10日が標準初発日となつている。

小野市下来住町　　養父郡八鹿町
神戸市御影町、六甲山、雌岡山

31. スギタニルリシジミ

Celastrina sugitanii MATSUMURA

1952年松井俊公氏が戸倉峠に採集したのが本県での初めである。爾来筆者らはその幼虫の食餌であるトチノキを目あてに播磨但馬境の渓谷や兵庫鳥取の県境辺りを索めてきたが、1957年養父郡大屋町西谷方面に産することを知り、さらに本年（1958年）中播の一角に饒産地を発見することができた。このように本種が比較的最近まで知られなかつたのは、その発生が早く、かつ出現期間が短いからであろう。

年1回の発生、出現は4月中下旬、所によつて5月上旬に及ぶ。

本種は狭範囲にしかも多数群生するので、一たび発生地が見つけられると乱獲される危険があり、京都府下貴船の徹を踏むことのないよう、愛蝶家の自重を要望したい。

宍粟郡戸倉峠　　養父郡若杉峠

32. ツバメシジミ

Everes argiolus hellotia MENETRIES

きわめて普通な種で、低所より高地にまで広く分布する。

年数回の発生を繰りかえし、4～10月末の長期にわたつて見られる。

♀翅表の色彩は変化にとみ、後翅外縁部の紅色斑がほとんど消失して全面黒褐色となるものや、また前翅の基部近く美しい紫藍色鱗を具うものがある。

幼虫はコマツナギ・ハギを食草とする。

小野市神明町、万勝寺町　　佐用郡大日山

神戸市御影町

33. クロツバメシジミ　Tongeia fischeri EVERSMANN

1919年長野県上田市における発見以来、同県下の島々谷や大分県耶馬溪をはじめ栃木・岡山県などに採集されたが、分布はきわめて散発的である。本県下にもかならず得られることと考えられたが、1955年ついに松井俊公氏により宍粟郡山崎町から見出された。これは近畿諸府県からの最初のものと思う。ついで1957年小野市内の一部にも発生することが山本によつて確められたが、両地とも発生範囲はきわめて狭く、個体数も少いようである。そのため乱獲による絶滅が杞憂される。

幼虫はいずれもツメレンゲを食し、産卵されてより羽化するまで凡そ23日。発生は年3回とあるも、小野市にあつては少くとも年4回、ことによれば5回が繰りかえされるのかもしれない。即ち4月下旬出現して一世代を5月中旬に終り、第2回は6月下旬より7月中旬に、第3回は8月に、そして9月中旬以降さらに1～2回が行われるものと想像される。

母蝶は食草付近より余り遠くへは移らず、飛翔ぶりは遅鈍である。多くは食草のあ岩肌や路上の礫の間に静止し、花や草葉にくることも少くない。（春、カタバミ、ギジムシロなどの黄色花、秋、ツルボなど紫紅色花に観察）。また山崎町には家屋の屋根に食草の自生するものがあり、ために人家近く得られる由である。

小野市

日本セリ科植物誌

この度、京大植物教室の広江美之助先生は、日本をはじめ米国各地の標本室、博物館で本科のものを研究され、これらを基にして分類困難を極めた本科を整理された快著である。ことに詳細な検索表と図のあることは喜ばしい。皆々様の御購入をおすすめする。

(1) **Umbelliferae of Japan** By Minosuke Hiroe and Lincoln Constance, University of California Publications in Botany, Volume 30, no. 1, pp. 1-144, 75 figures in text. Issued October 22, 1958. Price, $ 2.75

(2) **Umbelliferae of Asia** (excluding Japan) No. 1 By Minosuke Hiroe, Botanical Institute, College of Science, Kyoto University, Kyoto Japan. Issued November 20, 1958. Maruzen Company, Ltd. Kyoto Branch, Kawaramachi-Takoyakushi, Kyoto Japan. Price, 580 Yen

上記両著ともに丸善書店の各支店において販売取扱中である。　（室井　綽）

国立公園〝六甲の自然〟

室　井　綽　編

新書版、図及び写真　72個、　173ページ　150円、　六月社刊

阪神市民のオアシス、海抜 900mの六甲連山は、その変化に富んだ雄大さと都心から30分で頂上の冷気を味わえる便利さから、近年とみに家族連れの登山客が増してきた。こんなときに本書を携帯登山し、この六甲の成因をさぐり、歴史を知り、草花を尋ねることにより一段と親しみを増すことができるのは愉快なことだ。

さらにまた、その自然を愛し育てていこうという気持を伸すとともに、多くの若い世代が楽しみつつ観察眼をひらき、自然への探求心の根源を醸成する一助ともなりうる楽しく、美しい、しかも科学的なガイドブックである。　（岡村はた）